

「神が私たちの味方という盾」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

June.21.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

先週に続けて、16節の「信仰の盾」についてもう少し考えていきたいと思っています。

「信仰の盾」の仕事は、「悪い者、つまり、悪魔が放つ火矢をすべて消すこと」です。

私たちの中に罪が住んでいるということも事実ではありますが、それ以上に、不必要に私たちの罪なる部分を駆り立て、駆り立てた罪を燃え上がらせて、その火で私たちを燃やし尽くしてしまおうとする悪魔の火矢が、色々な形で放たれることを先週は学びました。

神様が喜ばれ、また私たちの霊が喜ぶようなことをしようとする、例えば聖書を読んだり祈ったりしようとする、変な邪魔を入れてきます。

または突如、本能的生理的な衝動を駆り立てて、性的誘惑を起こしたり、怒りを爆発させたいという短気を引き起こさせたり、人に自分を認めさせたいという自己顕示欲を沸き立たせたり、物欲だったり、あるいは、神を疑わせること、聖書の言葉を疑わせ、神を冒涇するような態度を取るよう誘ったりすることをもって、結果、「何で私はこんなことをしでかしてしまうのだろうか… 私はキリスト者と言えるような者ではない… こんな罪を犯して、どんな顔して教会に行き、どの面下げて、神様に祈れようか…」と、私たちを不要な霊的自己嫌悪へと突き落とし、挫折へと陥れようとする悪魔の火矢があることを学びました。

このような悪魔の火矢を消すために、私たちは、「信仰の盾」を取ります。

悪魔にとっても、私たちにとっても、結局何が一番の霊的戦いになるのかと言いますと、神の前にあって絶望させること、神の前には出て行けないという境地、奈落へと私たち人を、信仰者を至らしめることです。

絶望が、なぜ、信仰の戦いなのかと言いますと、以前もお話ししましたように、結局のところ、絶望とは、高慢・驕り高ぶりと同じだからです。

絶望は、突き詰めますと結局、自分自身に期待があるから生じるものです。

「少なくとも、私はこれぐらいは出来る」という驕りのようなものが残っていて、「これさえも出来ないのか」という絶望が生まれます。

つまり、絶望は、高慢の裏面ということにもなるでしょう。

表面が高慢で、裏面が絶望です。

もちろん、「こんな罪を犯してしまった」と胸を叩きながら神の前への悔い改めへと繋げることは大事なことであり必要なことですが、それを過ぎて、「こんな私はもういない、もう使えない、もうダメだ」と挫折へと自ら沈み行くことは、謙遜を装った巧妙な高慢です。

なぜか？

神にではなく、結局自分に期待し、自分に希望を置いているからです。

また、イエス様が、父なる神様が命を懸けるまで、「あなたはわたしの目には高価で尊い」と仰って下さるその御言葉を否定することになるからです。

そして、それを否定させることが、正にサタンの目的であり、信仰の戦いになるわけです。

Part One

キリスト教信仰において大切な核となる単語を一つ挙げるとすれば、そのものずばり「信仰・信じる心」と挙げる方もおられますし、人によっては「恵み」と挙げる方もおられるようですが、このどちらも、聖書の見解からすれば、同じ意味のように思えます。

もし私たちが、「信仰・信じる心」と「恵み」という言葉が、違う意味を持つ言葉のように感じられる、もし「信仰」と「恵み」の意味合いは違うと思うならば、「信仰」というものについて聖書が語る内容とは違うように理解していることになるかもしれません。

「恵み」と言いますと、その焦点は、当然ながら恩恵を施す方に行きますが、「信仰」と言いますと、一見、信じる人間側・こちら側の行いようについ思えてしまいます。

でも、先週学びましたように、「信仰」において最も大事なことの焦点は、信じる対象へと行かなければなりません。

つまり、信仰において最も大事なことは、何を、誰を、どなたを信じているのか、その方がどんなお方なのかが、その内容のすべてを決めるということです。

聖書の説く「信仰」、「キリストを信じる信仰」とは、信じる側の私たちによって左右されたり決定付けられるものではなく、信じるお方にかかっているということです。

信じる人・信じる側よりも、信じる対象がどなたなのかが、その信仰の価値を決めます。

信仰の良し悪しを決めるのは、何でもいいからとりあえず熱心に信じればいいという宗教多元論的なものではなく、神というお方が、信じるに値するお方なのかどうかの戦いです。

宗教多元論というのは、簡単に言いますと、山の頂上を目指して登るのに、道は一つではなく幾つもあるから、どの道を使ってでも、とりあえず登りさえ

すればそのうち頂上に着くから大丈夫というものです。

つまり、信じる対象が何なのかよりも、信じる私たち側の行いや信心に掛かっているというものです。

でも、聖書はそうは言いません。

「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でイエスの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです」(使徒 4:12) と書かれている通りですね。

要するに、「信仰」も「恵み」と同じく、施して下さる方、与えて下さる方にその焦点・重点があるということです。

だから、このことを誰よりも、私たち人間よりも、はるかに正確に知っているサタン悪魔は、神ではなく、人を攻撃し、つけ狙うというわけです。

「お前、そんなことで信仰者と言えるのか？ そんなことまでしでかして、よく礼拝に出席できるな、よく賛美が歌えるな、よく礼拝者面して座っていられるな」と、神ではなく私たちへと焦点を絞らせる火矢を放ち、自分への失望という高慢の中で燃やし尽くしてしまおうと攻撃してきます。

私たちが冒した罪や失敗を利用して、「その罪や失敗自体が、私たちの信仰を土台から揺るがし、崩れてしまうものなんだ」と思い違いをするように、サタンは攻撃をしてきます。

もちろん、罪を幾らでも自由に侵していいというわけではありません。

神の御前に悔いるひざまずけるということを含めて信仰であり、私たちに与えられた「信仰」、神より始まり、神によって立ち、神が根拠であるキリストを信じる信仰は、決して私たちの失敗や罪によって崩れるようなものではないということです。

Part Two

聖書の説く「信仰」は、神ご自身であり、神というお方存在そのものです。

「主であるわたしが、あなたがたをわたしの民とし、わたしの子とした。わたしがあなたがたを選び、わたしのひとり子によってあなたがたをわたしの宝の民とした」と、神様が仰る通り、「信仰」は私たち側ではなく、神から始まった「恵み」です。

このことをローマ書の御言葉を通して、確認したいと思います。

ローマ人への手紙 3 : 19 - 27 a (パウロ)

私たちの一切の誇りは取り除かれました。

私たちの行いも、永遠の滅びからの救いにおいては何の意味もなさず、ただ唯一、イエス・キリストによってのみ救われるということです。

ここにありますが「律法」という言葉の意味は、私たち側の「行い」を意味す

る言葉です。

つまり、「種を蒔いたら芽が出て、収穫を得た」というような、私たちの行いに伴う結果が、信仰ではないということです。

原因と結果の法則が、私たちの永遠の滅びからの救いにおいては、全くもって適用できる余地がないということです。

「律法」、つまり、神が示す「こうしなさい。ああしなさい」という神の命令、御言葉を100%完璧に守れる人など誰一人としておらず、そのみか、生まれながら全ての人に神様が植え付けて下さった誰もが持っている良心という基準においてでさえも、完全に満たせる人なんか誰もいないということです。

じゃあ、どのようにして、救いに至ることが出来るのか？

私たちでは、至れません。

イエス・キリストの十字架の死が、私の罪のための贖いだということを信じ、つまり、私の救いはイエス・キリストから始まり、イエス・キリストが原因であり、イエス・キリストにすべてを頼った、ただ100%神の恵みによるものだということです。

結果を提供したのは私たちではなく、神様が結果をご準備下さって、その結果を私たちに賜った、私たちはただ頂いた、頂くしか出来ない「恵み」だということです。

ゆえに、私たちの「信仰」は、私たち側から出て来たものではなく、神様発祥の、神様から100%授けられ与えられたものだということです。

悪魔は、ここを突き、ここを攻撃してくるのです。

信仰を、人様の行いに立脚させて、「私は救いに与るに相応しい。私はあれもしたしこれもしたし、天国に行ける理由があるはずだ」と、しきりに自分自身という人を根拠にさせようと誘ったり、逆に、あ「私はやっぱり、また罪を犯してしまった。私は悪い考えをしてしまった。私は取り返しのつかない間違いを犯してしまった」というところに追い立て、埋もれさせ、自ら絶望する方へと焚きつけて行きます。

「何が何でも、何はどうあれ、先ず神の御前に出て行く」という真の遜りとは違い、「絶望させる」ことをもって、サタンは、その目的を果たします。

「望み」を私に置いたために生じた失敗が明るみに出ると、信仰までもが無くなってしまおうかのように思えてしまうおかしいところへと追い立てられ、そんな風にサタンに追い立てられていることを見失ってしまいます。

そこから守ってくれるのが、「信仰の盾」です。

キリスト教信仰の核が何なのかを、はっきりと知るのです。

私を根拠とするのではなく、私に守れる能力があるから頂いたものでもなく、神の恵みにより、あわれみによって値なしに与えられ頂いたもの、私たちのすべての根拠は私たちにあるのではなく、神様の恵み深さと、あわれみと、力と、知恵にあることをしっかりと知るのです。

これが、「信仰の盾」です。

私の知っている決して憎むことの出来ないあるクリスチャンの方の話なのですが、会社を経営されている方で、その会社の職員の方々も全員、社長さんがクリスチャンだということを知っていました。

ところが、この社長さん、まあ怒るし、苛立つとお酒を飲んで酒癖の悪さは発揮するし、机の上の資料をひっくり返すこともあるしという方だったのですが、その会社の部下の方が、ある日、こんな質問をしたそうです。

「社長、社長はクリスチャンなんですよ？」

「ああ、そうだよ。」

「でも、私がイメージするクリスチャンという方たちの姿とはかけ離れてるんですが、そこんところはどうか？」

まあ勇気のある質問をしました。

すると、その社長さんが名言をもって返します。

「だからクリスチャンなんだよ。こんなだから、イエス様信じてんだよ。」

「こんなだから、イエス様信じてんだよ！」

なんという名言でしょうか。

「あの人はイエス様信じてないけれど、あんな立派なことをした立派な人なんだから、天国に行くはずだよ」という言葉ほど、間違った言葉はないでしょう。

私たちクリスチャンでさえも、このように思ってしまう、また自分にも当てはめ兼ねない言葉かもしれません。

一緒に信仰生活を送っている仲間のうちの誰かがハチャメチャで、「あのクリスチャンなのに、なんであんななの？」と思うならば、ちょっと極端に言いますと、その思いの方が間違っているんだと思います。

むしろ、「いや、あの人がイエス様信じなかったら、誰がイエス様を信じるの！」と思ってこそ、人ではなく、神を根拠とする信仰になります。

私も大学生の頃クリスチャンになった時、「え、お前がクリスチャン？」と、周りの人に驚かれましたが、「あんな人こそ、イエス様を信じなくちゃ！」というのが、聖書の教える福音です。

エペソ書を書いた使徒パウロ先生ご自身も、正にそのような方でした。

Part Three

私たちは、救いに与る資格も、条件も、能力も無いにもかかわらず、救われました。

ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによる代償ゆえに義と認められました。

キリスト者がキリスト者となれた条件のすべては、「神様が私という人をおかいそうに思って下さった」というところに掛かっています。

それだけが、今ここに、私たちが居る唯一の理由です。

そうであるならば、もしサタンが、私たちに火矢を放って攻撃してくるならば、どう返すべきでしょうか？

「そうだ。お前の指摘は合ってるよ。私が罪深いのは、お前あも知っているし、私も知っているし、神様も知っている。だからこそ、クリスチャンなんだよ」と返すのです。

逆に、「そうだよ、お前は間違っていない。確かに私はどうしようもない。私はダメだ」となったら、まんまと悪魔の術中にハマるわけです。

「信仰」とは、私が私という人を頼りにするのではなく、信じる対象なるお方、主なる神、救い主イエス、聖霊なる神様が、私という人をどのように見て、どのように扱って下さっているのかを知ることであり、それがすべてです。

一言でいうならば、ローマ書 5：8 の御言葉通りです。

ローマ人への手紙 5：8 (パウロ)

「私たちがまだ罪人であったとき」とは、実際に悪いことをしていたということも当然含まれますが、もっと本質的な聖書的な意味は、「神に背を向け、神を無視しながら生きていた頃」という意味です。

その頃は、神の目に悪であることを平気で行っていた時であり、神がおられることも知らず、頑固で、自分を神としていた時です。

そして、そんな時に、神様は、私たちを愛して下さいました。

だから今は、それでも神様のために生きようと生きたいと思えるようになりましたし、悪いことをしたならば悔い改めたいと思えるようにもなりましたし、罪を犯したことに對する痛みも覚え、「こんなんでも、イエス様信じていると言えるのだろうか」と胸を打てるようになったとは、どれだけ大きな、信仰的進歩でしょうか。

つまり、私たちが神様の前にあって、あってはならないようなことをしていた頃と比べると、今は、結構マシだということです。

そんな風に変えられているのに、神を信じることを辞められますか？

辞められません。

これが、「信仰の盾」です。

民数記 23：19 に、

民数記 23：19 (パウロ)

神は人ではないから、偽りを言うことがない。人の子ではないから、悔いることがない。

とありますが、この御言葉の通り、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神様は、私たちをお救いになったことをただ一度も後悔されたことはありません。

神様は、私たちを喜びをもって呼び出して下さり、贖い出して下さり、私たちが救われたことをすべての天の御使いたちとともに喜んで下さったお方です。

イエス・キリストを信じる者たちは皆、誰一人例外なく、神に背を向け、神を無視し、神を知らなかった、「まだ罪人であったとき」よりも、確実に良くなっているということです。

そんな事実を否定しようとする悪魔に対して、私たちは、「信仰の盾」を取るわけです。

ローマ書8章では、このことを、こんな風に説明しています。

ローマ人への手紙8：31（パウロ）

神様が、私たちの味方です。

私たちの信仰の根拠は、私たちが良い人だからではなく、神様が私たちの味方だからです。

神様の要求や条件を満たしたからではなく、神様が、私たちの味方だからです。

どれくらい私たちの味方かと言いますと、

ローマ人への手紙8：32－33（パウロ）

というところまで、味方です。

この御言葉の内容が、正に、私たちの「信仰の盾」となるのです。

神様が、私の味方です。

だれが、私たちをキリストの愛から断ち切ることが出来るでしょうか？

ローマ書8章最後の言葉です。

ローマ人への手紙8：38－39（パウロ）

これが、「信仰の盾」です。

私たちは信仰の盾を確かに取り、悪い者たちが私たちに向かって放ってくるすべての火矢を消すのです。

私を根拠とした高慢と、私を根拠とした絶望から抜け出すのです。

私たちのすべての希望の根拠は、神であり、神が私の味方であるということです。

神様が他の思いを抱かれるならば、私たちに問題が起こるかもしれませんが、神様が他の思いを抱かれない限り、私たちを揺るがすことは出来ません。

これが、聖書が私たちに教えて下さる、信仰において最も重要な内容なんだと思います。

Part Four

無論、私たちが信仰の戦いをする時には、いつも悩みと苦悩が伴いますし、失敗します。

もっと完璧であって、もっと神様から褒められるような人でありたいし、聖なる勝利者でありたいと願いますが、いつも転びます。

罪を嫌い、聖なる者でありたいと願うけれども、そうではないということに悩めますし、苦悩します。

でもこれは、信仰が劣っているという問題ではなく、せっかちで、気が焦って待つことが出来ていないという時間差の問題です。

信仰が深まれば深まる程に、もっと罪に対して敏感になり、少しのことでも信仰的良心の呵責を覚えるようになります。

昔は、何ともなかったのにです。

昔もよりも悪い罪を犯しているからではなく、呵責が以前よりも大きくなって、その呵責が私たちを揺るがすようなことが起こります。

あたかも白い服を着たかのようにです。

明るいグレーの服を長いこと着ていますと、やがて暗いグレーになり、ちょっと汚れたぐらいでは気付かなくなります。

ところが、白い服は、いつ着ても、ほんの少しでも汚れが付くと目立ちます。

服の色やファッションを突き詰めると、結局、白に行き着き、最もおしゃれな人は、白いズボン、白いスカートをはく人だと聞いたことがあります、少しでも汚れたらいつでもはき替える準備が出来ている人なんだということでしょう。

最高のお洒落さんです。

黙示録を見ますと、「子羊イエスの血潮でその衣を洗い、白くした」(黙示録 7:14) 主イエスを信じる聖徒たちの姿がありますが、正にです。

正に、イエス・キリストの十字架の贖いによって白くされたという事実をその身に纏っているのが、キリスト者です。

罪を知り、罪に嫌悪感を覚え、罪を犯したくない、神に喜ばれないことはしたくないし、神に喜ばれることをしたいというその思いが、実際に形となって現れるまでには、何度も失敗し、何度も躓くことになるかもしれませんが、その白い服を着せて頂いたという事実と内容が一致していくようになると、私たち信仰者には約束されています。

だから私たち自身、必要以上に委縮する必要もないですし、不必要に人を委縮させる必要もありません。

それこそ、神ではなく、人を根拠とした、信仰もどきな行為になってしまうんだと思います。

だから私たちは、信仰生活を送る中で、不要に潔癖症的信仰に陥ることを注

意しなければならないでしょう。

罪に対して敏感なことは重要なことだと思いますが、それをもって人を苦しめ、自分を苦しめることは、本末転倒なことになってしまいます。

Conclusion

悪魔から火矢を放たれた時には、「そうだ、私は失敗した。でも、主イエス様は失敗されない。私も、あの人も、今よりももっとダメだった時に、神の愛を受け、今も主が私たちの味方である。さらに私たちを追い込みたいならば、神様のところに直接行って、はむかいなさい！」と、信仰の盾を取るキリスト者でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝福：ローマ書 8：31b